



# フェローシップ・ニュース

## NO.39

### JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動報告 第2回派遣(2010/1/17~23)

このたびアパリストッフを含め3名のプロジェクトメンバーが、フィリピンに行ってきました。今回渡航したメンバーは、三浦、山本、そしてアパリ・ソーシャルワーカーの古藤です。さらに、このプロジェクトのために英語/タガログ語のレクチャーをしてくださっているフィリピン人のマリデルさんも、後半に現地で合流することとなり、通訳などのサポートをしていただきました。

2009年の9月、フィリピンからファミリー・ウエルネス・センター(FWC)代表のリッチーさんをはじめ、コアメンバーのガブリエルさん、ジュンさん、デビッドさんの4人が来日し、東京・群馬・山梨に滞在しながら研修や打合せを行いました。その後、現地ではリッチーさんが中心となり、貧困層を対象とする薬物依存回復ミーティングの開始に向けて、会場の決定、関係機関とのやりとりなどが進められてきました。昨年11月には、マニラの多くの地域が集中豪雨による大規模な洪水に見舞われ、ミーティング実施候補地のマリキナ市とタタロンも大きな被害を受けました。そのため、1月の訪問を延期することも協議してきましたが、被災地域はみるみると復興し、現地からもプロジェクト進行に支障がないとの報告を受け、今回の訪問となりました。

現地での具体的なスケジュールは別表のとおりですが、今回の訪問では、プロジェクト実施のための実務的な話し合いがおこなわれ、貧困層を対象にしたミーティングがいよいよ開始できる段階になりました。マリキナ市では、公立のリハビリ施設内でプログラムを行うため、保健行政機関とリハビリ施設それぞれのディレクター等を交えて会合を開き、市側からも厚い歓迎を受けることができました。なお、これまで暫定的に“アパリミーティング”と呼んでいたミーティングの呼称は、“アディクション・リカバリー・ミーティング(ARM)”に正式決定いたしました。

現地のJICA事務所、リッチーさんをはじめFWCのスタッフ、現地コアメンバー、タタロンのアディクタス・フィリピンのイブリンさんをはじめ、このプロジェクトに関わっていただいたり、後方支援していただいている多くの方に深く感謝いたします。

#### < 第2回渡航スケジュール >

- 1/18(月): JICAフィリピン事務所訪問、ファミリー・ウエルネス・センターにて打合せ
- 1/19(火): ファミリー・ウエルネス・センターにてカウンセリングのレクチャー
- 1/20(水): ファミリー・ウエルネス・センターにて打合せ
- 1/21(木): マリキナ市保健センターにて会合を開く  
マリキナ市ドラッグ・リハビリ施設見学、タタロン、アディクタス・フィリピンにて打合せ
- 1/22(金): タタロン、アディクタス・フィリピンにて打合せ&ミーティング、  
リッチー氏自宅にて最終打合せ



JICAフィリピン事務所を訪問  
左から古藤、リッチーさん、山本、三浦



マカティにあるFWCの新事務所にてプロジェクトの打合せ



マリキナ市の保健センターで会合を終えて

特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日  
2010年3月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

#### 目次:

フィリピンプロジェクト活動報告	1
薬物依存症と家族の対応について...町田政明	3
第3回DARSより...近藤恒夫	4
寮者からのメッセージ...ドン	6
書評...竹内達夫 拘置所のカボカ 会員募集	7
アパリからのお知らせ	8

## フィリピン訪問を終えて・・・マサル（山本）



マリキナ市の保健センターの会合でプロジェクトの説明をする古藤



滞在中に山本の誕生日を祝ってもらいました

JICAのプロジェクトに参加させていただいて、今回で二度目のフィリピン訪問になります。前回の視察で予想以上に話が進み、おおよそ、どこで貧困層の薬物依存症の人たちに対してミーティングを行っていくかが決まった中、今回の渡航はいつどのように行うか具体的にしていけるのが目的で、1月17日から23日までの1週間の滞在となりました。

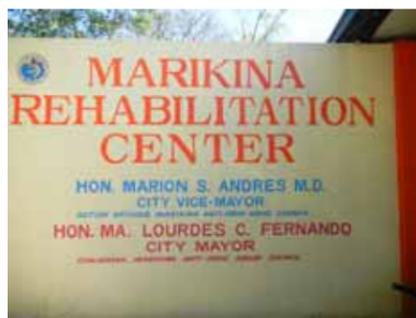
まずはJICAをFWCのリッチー氏らと共に訪問し、その後何日かFWCにて、コアメンバーを含めて入念な打ち合わせをしました。その中で、多少考え方の行き違いや、予定の変更等もありましたが、最終的には良い方向に落ち着き、20日にマリキナ市の保健センターにて、同市の薬物依存リハビリ施設の職員を交えて会合を開きました。その後これからミーティングを行う予定の場所である施設（マリキナ・リハビリテーションセンター）を見学に行きましたが、ま、一口に薬物依存のリハビリ施設と言っても、実際は殆んど刑務所に近く、鉄格子の中で生活をしており、その中で行われているプログラムは聖書を読むだけだと聞いて、ミーティングを行っていく重要性を強く実感しました。

今後はこの施設内で毎月1回、中の入所者と、既に外で生活をしているアフター・ケア・プログラムの人達を対象に定期的にミーティングを行う事になります。（2月半ば現在、既に第1回のミーティングが行われ、入所者3名、アフター・ケア2名が参加したそうです！）

その後場所を移し、タタロンという、もっとも貧困層が多い居住区にて打ち合わせをし、今現在そこで薬物の問題を抱えている人達に向けて、自分の体験談を含めたメッセージを伝える機会がありました。同行してくれたマリデルさんの通訳のお陰もあり、とても熱心に聞いてくれて、私たち自身も感激しました。ここでもこのコミュニティでボランティアをしてくれている人達の協力と理解が得られ、近いうちに定期的にミーティングが行われるようになると思われます。

いずれにせよ、一つが実際に稼働し始めた事は大きく、今後いかに継続させて行くかが重要であり、それらがどのように効果が出てくるのかはまだ分かりませんが、一人でも多くの仲間たちが回復の道へ歩んでくれることを願っています。

マリキナ市の  
リハビリ施設にて



この施設でARMが行われていく予定です



カウンセラーやボランティアスタッフとともに



施設の中は鉄格子です

### 【事業概要】

**事業名:** マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業

**事業の背景と必要性:** フィリピンには約200万人の薬物乱用者がいると言われる。その多くは覚せい剤乱用者である。覚せい剤はフィリピンでは“shabu”と呼ばれているが、日本の覚せい剤の隠語である「シャブ」に由来するものである。覚せい剤は、1gあたり約1500ペソであり、100ペソ程度の小さな包装単位でも入手が可能なため、貧困層においても使用が拡大する原因の一つとなっている。日本人が発明した覚せい剤の問題に苦しむ薬物依存症者の回復支援をすることは、薬物乱用の歴史的背景からも妥当性の高いことである。マニラでは回復プログラムにつながる薬物依存症者は富裕層のみであり、貧困層にまでいき渡っていない。日本での回復プログラムの核であるミーティングをマニラの貧困層で開くことにより、誰にでも回復のチャンスがあるということを広く認知してもらう。アパリミーティングが地域で開催されることで貧困層の中でも薬物依存からの回復が可能となる。

**事業の目的:** マニラの貧困層に薬物依存症者のためのアパリミーティングが開催される環境が整う

**対象地域:** フィリピン マニラ市の貧困層地域

**受益者:** 依存症者本人とその家族、リハビリ施設職員、精神病院職員等

**活動及び成果:**

1. 本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。
2. コアメンバーの本邦研修により、アパリミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。
3. 現地で模擬ミーティング（アパリミーティング）を開催し、地域で薬物依存症についての理解とアパリミーティングに対する理解を深める。
4. ミーティングの際に使用するアパリミーティング・ハンドブックを作成する。

**実施期間:** 2009年5月～2012年3月（約3年）

**カウンターパート:** ファミリー・ウェルネス・センター＝FWC（マニラ）

**協力機関:** アディクタス・フィリピン（タタロン）

タタロン地区にて・・・



アディクタス・フィリピン この施設でもARMが行われる予定です



日本のメンバーの体験談を熱心に聞き入る薬物使用経験者

## フィリピンプロジェクト緊急支援金募集！

フィリピンのプロジェクトをより良いものにしていくために、また、多くのダルクの卒業生が支援に関われるよう支援金を募集します。このプロジェクトはJICA（国際協力機構）との協同事業ですが、予算が限られているため、渡航回数や、派遣人数に限りがあります。また、ARMに参加したくても交通費がなくて参加できない人のための交通費にも充てたいと考えています。

ご協力いただける方は同封の振込用紙あるいは下記口座にお振込をお願いいたします。

郵便振込番号：00160-7-136870 アパリ東京総本部

三菱東京UFJ銀行 笹塚支店 普通 0981567 特定非営利活動法人アジア太平洋地域アディクション研究所 理事長 近藤恒夫

家族のための連続講座

### 薬物依存症と家族の対応について（14）

#### 「家族が学ぶべきこと（2） ～回復させようとしなない～」

カウンセラー 町田政明

家族は、どうしても息子や夫を治そうとしますが、治そうとするとするほど本人の病気は悪化します。治すのを諦めると治る可能性が出てきます。どうしてでしょうか？回復させようとしなないという視点から、家族の対応を考えてみたいと思います。

#### 1. 話をしない～薬物依存症者は反抗的である

薬物依存症の人は、頑固で自己中で他人の話を聞かない日光の猿ですから、いくら説教や説得をしても無駄です。どんどん自分の殻にこもって、ますます他人の話を聞かなくなります。言えば言うほど母親や妻の言うことに逆らうようになります。反抗的な薬物依存症者に何か説教や説得を言うことは逆効果です。そんな話はしないで、何の差し障りもない話をするか、全く話をしないのが良いです。

家族は話をしても効果ないことを知らないといけません。

#### 2. 野に放つ（薬をやる自由）

反抗的な人は、野に放つのが良いです。のびのびと好きなように生きてもらい、どんどん薬を使うと良いと思います。母や妻は薬をやめさせたり、何とか大ごとにならないようにとすると回復しないのです。回復するためには、野に放ち自分のしたことのつけは自分でするようにたくましく育てないといけません。

いつも薬をしてはいけないうから、反抗的な依存症者はどうやって薬を使うかということしか考えません。自由に薬をやり続けると、いつか自分の人生において薬をやることとやらないことを天秤に掛け、どちらが良いか自分で考えるようになります。薬をやめるためには、薬を自由にさせてその自由の中で自分で選択してもらおうしか回復はありません。息子や夫を自分の囲いから野に放って下さい。

#### 3. ペット扱いしない（子供扱いしない）

今まで息子や夫が薬物依存症と分かり、何とかやめさせようと、又は薬をやる以前から本人をコントロールするやり方をしてきませんでしたか？

いろいろと心配で先取りして手をかけたりすることにより、ますます本人は、幼い子供のように何もなくなり、さらに進行すると赤ちゃん化します。そして何とか家族は本人をコントロールして薬をやめさせようとします。親は本人が働かなくなっても何とか仕送りをしたり、妻は一生懸命働いて一家を支えます。そうするとますます本人は何もなくなります。薬をやっていないなくてもウツになって働けないというケースもあります。ほとんどウツは薬のせいだとは思いますが。さらに進むと何もしない人になり、家族はブツブツと愚痴や苦しいと言いながら、援助することを止められなくなります。

外から見ると世話することや援助することが生きがいのようなカプセルに入ってしまう。本人が大人ならペットのような扱いをせず、一人前の対等な成人として接して下さい。

#### 4. 病気の正体を知る

家族も病気と分からず、病気の正体も知らずに、このカプセルに入ってしまったのであり、まずこの病気を理解することを始めないといけません。糖尿病の場合でいえば、この病気を理解しないで、一生懸命カロリーオーバーな美味しい食事を出していたようなものです。

病気の正体知らないで、家族は全く逆効果の事をしてきてしまったのですからそれは仕方ありません。まず家族自身がこの病気の正体を知ってください。

ですから、この病気の正体をまず家族が知ることが大切です。そして、本人に自分の知ったこの病気を教えてください。つづく

**家族の体験記  
好評販売中！**

『ギャンブル依存症に悩む  
家族の物語  
～絶望から希望へ～』

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円  
発行：ホープヒル  
(アパリで販売中)

5. 一度だけ「病気だ」と伝える

家族と同じく本人は病気と知らないで苦しんでいるかもしれません。もしそうならば、薬物依存症という病気があると伝えて下さい。

そして伝える時は、薬物依存症は意志が弱いからなる病気ではないこと、回復できる病気である、本人がダメな人間だから薬物依存症になるのではなく、薬物を使えば誰でもなる可能性がある、薬物依存症から回復する方法がある、家族はいつでも薬物依存症から回復するためならば、いつでも手助けする、あなたが本当に心配で、家族はあなたの事を心配している(愛情を持っていること)。

以上の事を直接落ちて話ができる時には、直接話をする。話ができる状態でない場合には、手紙を書いてください。この時にはダルクの本などの資料を渡してください。今すぐ見なくても良いので、渡すだけ渡してください。

このことは一度だけします。毎週手紙を書いていたとか、電話をひっきりなしにしていたという親がいますが、絶対に一度だけにしてください。薬物依存症の人は反抗的だということをお忘れなくください。言えば言うほど逆効果になります。

6. 信頼して待つ

家族は薬物依存症の本人をペット(子供)扱いにしないで、野に放ちその間家族は病気の正体を知るために、アパリの家族教室やナラノンに出てるなり、本を読んだりして勉強して病気の正体を突き止めて下さい。

そして情報を一度だけ与えたら、「忍」の一字でじっと待つのです。本人を大人としてみるのですから、本人は自分で立ち直る力がある、いつか回復の道を歩んでくれると彼を信頼するのです。彼の人生は彼のものです。私達はどのようにすることもできません。彼を信頼して彼の命を彼に返すのです。野に放つとはそういう事です。人生いろいろあると思いますが、彼に任せて、信頼して待つのです。

助けを求めてきた時には、「野で野垂れ死にするか、回復施設に行くか？」と本人に聞いてみてください。

7. 思いやりは依存症をダメにする

依存症の人は、人の優しさや思いやりを食べて生きております。人の優しさや思いやりがエネルギーなのです。そういう病気です。この病気には家族の人が思っているような優しさや思いやりが通じません。それがますます病気を進行させてしまいます。また、本人は何とか家族の思いやりや優しさを引き出そうと命がけです。ちょっとした隙や思いやりを喰いついてきます。

家族は優しく思いやってもうまくいかないで、ますます思いやりや優しさに熱中します。元々が思いやり過敏症(依存症)の傾向があるので、家族の思うような思いやりではダメなのです。

真の人との関わり方、真の愛の有り方が問われます。



第3回DARS 龍谷大学セミナーハウス 2010.2.19(金)  
「依存症国家・日本 - 無知が薬物依存患者を増やす」

近藤 恒夫



DARSにて  
講演する理事長の近藤恒夫

DARS (Drug Addiction Recovery Support) は、2009年5月31日に東京の御茶ノ水で開催されたある研究会に集まった12人の男女が、薬物依存症者の回復支援のための担い手を育成しようと立ち上がった集まりです。

私は26年前にダルクという施設を作った。そのモデルは同じ町内にあるみのわマックというアルコール依存症のリハビリ施設だった。その時代にはアルコール依存症からの回復は不可能と言われていた。当時の医療従事者は、単身者のアルコール問題は絶対解決できないと考えていた。2、3年マックでお手伝いをしていた。立ち直りが遅い人たちは、アルコールだけでなく、少年期、青年期にヒロポン、ハイミナル(睡眠薬)等の薬物を使った経験のある人だった。当時は薬物問題を抱える人もマックにいた。物を散らかしたりしていてトラブルのもとだった。分けた方が良く考え、マックの中に薬物ミーティングを作り、その1年後にダルクを荒川区東日暮里3丁目に創った。マックのプログラムで一つ感動していることがある。朝食を食べに朝7時に行く。365日おしんこのバイキングだった。生卵がつくのは奇跡的なことだった。納豆と海苔くらいしかなかった。その後午前中のミーティングを10時～11時半くらいまでやる。昼食後は脱兎のごとく遠いところのミーティングに通った。スタッフより入寮者が元気だった。経済的には一か所だけでミーティングをやっていた方がいいと思っていたが、そのときに地下鉄や国鉄を使って、いろいろな場所に出かけて行ったことが実はよかった。

汗だくになって切符を買おうとするのだが、緊張して買えない。せん妄の出ているような人でも3カ月も経つと顔色も良くなるし、重度の人でもすっきりとしている。回復には体験させることが大切。笑ったことがない人たちでも笑えるようになった。精神科病院ではすべてを周りの人たちが面倒みてくれる、依存症に対して優しすぎる場所だ。決められた時間にミーティングを始める。その時間に間に合うように計算して行動する。

私は『拘置所のタンポポ～のりピーうちへおいでよ』という本を書いた。彼女の子どものことは誰も考えていない。世代連鎖という意味でも、子供をどういうふうに守っていくのか。私はSミュージックと呼ばれていった。会長の息子が良くテレビに出ているが、何も分かっていない。どの報道もただバッシングしているだけ。マスコミの報道は道徳的な話に終始していた。唯一まともなコメントをしていた人が一人いたんです。デイブ・スペクターだ。施設に入れなさいと言っていた。私たちの切り口は、彼女がなぜ薬に走ったのかということだ。喪失の痛みだと私たちは考えている。大切な人たちを次から次に失っている。小さいときはお寺に捨てられていたらしい。やくざなお父さんから逃げていたお母さんもどうなったかわからない。お父さんのお母さんに育てられていたという。再婚して九州と埼玉に行った。マネージャーも自殺、付き合っていた男もいなくなった。そういう時期に目をやるべきだ。自称サーファーと付き合ったのも、ほっとした場所が必要だったのだろう。

中川さんもそうでした。元財務大臣が、「オバマ～」とヘロヘロになった。あれは睡眠薬の酔いだった。あの時期が治療のチャンスだったはずだ。しかし治療しようという発想は誰にも出てこなかった。悪い奴だと言われただけだった。必死に酒を止めようとしていたのだろう。だから睡眠薬が必要だった。コントロール喪失、ただの依存症です。大臣が依存症になる。これは立派な事実である。出てきたらバッシング。後援会長がおまえはもう酒をやめろと壇上から言った。本当のことを言えばいいのに。やめられない・・・と。大臣だから。大臣がアル中になったら困る。ここで私が怒りを感じたのが彼の周りにいた医者だ。なぜアルコールがやめられない人に睡眠薬を出したのだろう。あれは完全に医療ミスだ。

マイケルジャクソンも麻薬ではないが大量に鎮痛剤を注射で打って亡くなった。医者が責められているが、デイブ・スペクターは言っていた。あの医者でなくてもたくさん違う医者はいただと。

日本の薬物問題は、タリバン化（原理主義化）している。ダメダメ言うだけ。

相撲取りがなぜ大麻を吸うかということ、大麻は食欲増進作用があるからだ。ラクダでも乾燥大麻を食べる。ロシアから体のでかい男を輸入してきてちゃんこ鍋を食べさせるんです。ボルシチを食べてた人にいきなり今日からちゃんこを食べさせるなんて無理でしょう。俺は気の毒だと思った。せめて治してから送り返すとか、あるいは1回目は知らなかったということで、多少救いや許しがあっても良いのではと思った。大学4年で大麻で捕まって退学になると高卒ですよ。正直になると日本では損する。アメリカ元大統領のクリントンは秘書と不純異性交遊をしていたという話をした。したことに對してはアメリカ人はみんな知っていた。セックスが悪いのではなく、していたのにしていないと言ったという不正直さが非難された。正直になることが大切。

薬物を使うには 金があるだけではだめで、 アジト（隠れ家）と 時間が必要だ。だから自由業の人が狙われる。

押尾の話になるが、彼は最悪だった。依存症もさることながらMDMAで泡を吹いている女の人を放置して今裁かれようとしている。たとえばみなさんがそういう現場に当事者としていたとしたらどうします？僕だったら逃げていますね。今は逃げませんよ。かつて使っていた時の状態でいえば、逃げていたでしょう。日本ではなぜどう対処すべきか教えていないのでしょうか。現実的な映像で伝えていかなければならないと思います。オーストラリアには対処法の教育ビデオがあります。

薬物問題は国家の一大事ではなく、地域コミュニティーの小さな問題でいいのではないかと考えている。日本全体が薬物汚染のようなことが書かれているが、実は社会内でできる事がいっぱいあるはずだ。国家のためとか自治体のためなどと大上段に構えないで欲しい。

法律が駄目というから退学になったと答えるだけでは何にも考えなくてよくなってしまっている。やっちゃダメと言われるとやりたくなくなってしまう。やめることをやめないと続かない。ダルクではやっちゃダメとは言わない。

刑務所に行かされるのも法律によって国家が勝手に行けと言うのだから何も考えなくてよい。裁判官に3つのオプションを示されて、選んだからにはお前に責任があるというような制度に代えるべきだ。私たちは責任を引き受ける能力に欠けている。

ダルクは仕事の紹介をしない。仕事は自分で探ささいという。仕事は中途半端なものではない。ダルクが紹介すると、ダメになったときにそれが自分の責任でなくなってしまう。薬物依存者はそういう性格、逃げる性格を持っているから司法も少し考えて、本人に選ばせるようにすべきだ。



DARSにて  
最終日に参加者全員に終了証が渡されました。



DARS 懇親会にて  
趣向を凝らしたファッション

## ドラッグ・ダイヤル

最近若い人からの  
大麻の相談が増えて  
います

こんな質問が多いです。  
「何で大麻はダメなの？」  
「どんな害があるの？」  
「やめようと思うんだけど  
どうすればいいの？」

どうぞお気軽にご相談  
ください。  
(プライバシーは固く  
守られます。)

電話相談は  
月～金の10時～18時  
：03-5830-1790

メールでの相談は随時  
受け付けています。  
メ-ル：info@apari.jp

## アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

### 「変化」

ドン

俺はちょうど4年前にダルクと出会いました。ある精神病院に入院していたのだが、入退院を繰り返す俺に親は困り果て医者にご相談したところダルクと言う場所を知り、親に説得を受けダルク行きを決意させられました。

施設ではミーティング以外に嫌な事はなかったけれど毎日退屈な日々でした。俺は1年間で施設を出る事だけを目指して、それ以外何も考えてはいませんでした。ミーティングで仲間の話を聞くこともなかったし、自分の話をすることもほとんどありませんでした。ミーティングに出ていれば薬が止まると言われていたけど、そんな事は最初から信じようとしなかったし、自分を変えようともしませんでした。俺は1年のバースデーに脱走をして地元に戻りました。1年間薬が止まっていたので受け入れてもらえると思ったのです。実家に帰ったものの親には受け入れてもらえず一人で生活する事になりました。

最初は良かったけれど、だんだん淋しくなり酒を飲み始めました。酒には問題がないと思っていたのですが量が日増しに増え、昔付き合っていた仲間を家に呼ぶようになりました。そのうち家は溜り場になり、また入院することになりました。

今回の入院生活は非常に辛いものでした。色々この先の事を考えたり、どうしようもない自分の事を恨み、生き方を変えたいと思い悩み苦しむ生活でした。どうにかしなきゃいけないと思い、前に居た施設に電話をする事にしました。施設では「もう君はうちの施設では受け取れない。他の施設に相談してくれ」と言われました。仕方なく地元の施設に相談し、他の施設を探してもらい日本ダルク アウェイクニングハウスにお世話になることにしました。

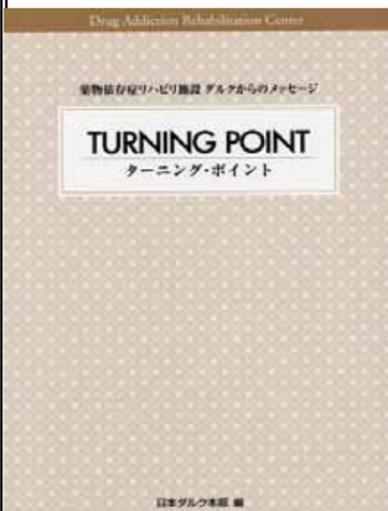
施設は大きく人数も30名位という大所帯にびっくりし、琉球太鼓というプログラムがあったり、自分の役割が与えられたりと、大変な施設だなと思いました。実際、今まで薬漬けの生活をしていたので太鼓をやるにしても体力がないからバテバテだし、ミーティングを聞く集中力もないし、役割もどうしても人任せになる事が多かったです。自分はもう駄目かなと思う時もありました。駄目になりそうになった時、仲間が何時も傍にいて助けてくれる事がよくありました。うちの施設には元気な先行く仲間が沢山いて、自分も元気な仲間の様になりたいと思う様になりました。自分も元気になれると信じて、今やっている事を頑張る事にしました。なかなか結果は出なかったけれど、絶対に叩けないと思っていた太鼓が叩けるようになり、人前で叩く機会が与えられすごく緊張したけどその事が自信へとつながりました。役割は食当をやっているのだけれど、仲間と食事を作ることによって一体感が生まれ、今まで人任せだったけれど仲間だけにやらせてはと思うようになり、仲間の力になりたいと思う様になりました。ミーティングも集中力が少しずつ回復し、人の話が聞けるようになり、心を開く事で少しずつ自分の話も出来るようになりました。でも、悩み事も多いです。薬なしの生活をしているため、自分の問題や欠点にぶち当たる事があるのです。まだ自分には変えていかなきゃいけない所が沢山あります。だけど今日の自分には「それ」に立ち向かっていく勇気をこの施設でもらいました。

もう逃げない。

俺の明るい未来が待っている事を信じて。

#### ターニング・ポイント

受刑経験のあるダルクスタッフによる最新の体験談12名の体験談と漫画体験記が載っています



1,000円

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

FAX : 03-5830-1791

メール: info@apari.jp

## 「援助職援助論 援助職が＜私＞を語るということ」 書評

アパリクリニック上野 理事長 竹内達夫

読書に縁の薄い私だが、時には本を手にする。このような機会の少ない私にも“大当たり”というものがあるようだ。

「援助職援助論」を読んだ。心の底まで揺さぶられる感動を覚えた。久しぶりに、本当に久しぶりに、本物に出会ったという実感がした。この書は、10人の専門家のそれぞれの「自分物語」である。

こう迄、ここ迄、己を見つめ気づきそれを提示できるものなのだ。見事にこれを隠すことなく行っている。己の生き方、人生を凝視し「自分物語」を語っている。

この「自分物語」、単なる体験発表ではなく専門職としての研鑽を重ねその中から研ぎ澄まされたものをコトバにより非常にうまく表出している。そのコトバは極めて平易である。したがって内容はとても明解だ。よく理解でき共感生み心に快く響く。

これら10人の専門職の人々の専門家としての実績、仕事ぶりには定評があると聞いている。十分に納得できる事である。

「自分物語」に接し、“強さ”というものは、“弱さ”に気づきそれをベースにして発している事も理解できた。

“弱さ”は弱さとして存在するものではなくどのように“しなやかな強さ”に変容していくものであることが十分に理解できた。

いまこの書を手にして先ず心に浮かんできた事は、この10人のどなたでもよい、出来れば10人の専門家全ての方のカウンセリングを受けたいとの思いである。切望しきりである。

必読書というものがあつたものと、いまさらながらであるが改めて強く思ったものである。援助職の世界では勿論、自己体験を重視する自助グループの人々、そして援助職に無縁と思っている市民社会の人々にも読んで貰いたいものと願うばかりである。

われも、かれも“人の子社会の子”である。



吉岡隆 著  
定価:2,400円(税別)  
発売:明石書店  
お求めは全国の書店へ

## 拘置所のタンポポ

日本ダルク代表 近藤恒夫 著

### 目次

プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ  
第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生  
第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか  
第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界  
第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか  
第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか  
第6章 新生した仲間たち  
エピローグ 私たちの未来  
発売:双葉社 定価1,400円(税別)

＜全国の書店でお買い求めいただくか、アパリにご注文ください＞  
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上、下記のFAXあるいはメールにてお申し込み下さい。  
FAX: 03-5830-1791  
メ-ル: info@apari.jp

### ダルク25周年 フォーラム 開催決定!

2010年8月18日(水)  
場所:浅草公会堂

詳細は決まり次第お知らせいたします。  
お楽しみに!

## 🌸🌸🌸🌸 新規会員 募集中 ! 🌸🌸🌸🌸

平成22年度の新規会員(正会員・賛助会員)を募集します。ご入会していただいた方には、会報「フェローシップ・ニュース」を毎号お届けします。また、書籍購入の割引や公開講座・フォーラム、自助グループ開催に関する情報提供等、様々な特典がございます。アパリは立ち上げて10年が経ちました。今後も、薬物関連問題の新たなシステムとネットワーク構築のために全力を尽くしていく所存です。アパリに関するご意見ご要望がありましたらいつでもご連絡ください。既に会員の方には継続のご案内をお送りします。

【年会費】 正会員:12,000円 賛助会員:6,000円

【期間】 平成22年4月1日～平成23年3月31日まで

【郵便振込】 番号:00160-7-136870 アパリ東京総本部

アウェイクニングハウスとは振込み先が異なりますのでご注意ください。



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

### アパリ東京本部

〒110-0014  
東京都台東区北上野2-2-2  
電話：03-5830-1790  
FAX：03-5830-1791  
Email：info@apari.jp

### アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313

#### 【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

#### 【入寮期間】

基本的に13ヶ月

#### 【入寮費】

月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください  
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成22年3月1日発行  
定価 1部 100円

## <アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

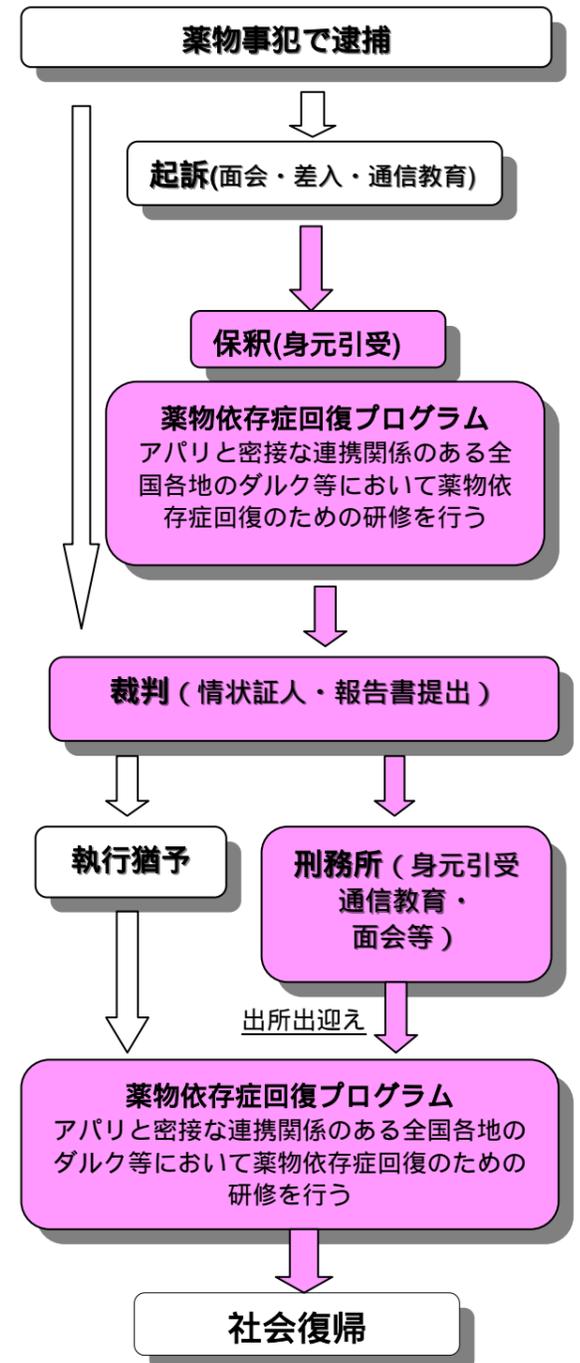
薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**10%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】

## アパリの支援



## <アパリ・家族教室>

日時	テーマ	ファシリテーター
3/1(月)	回復という奇跡	町田 政明
3/15(月)	ハイパーパワーについて	町田 政明
4/5(月)	回復させようとしな	町田 政明
4/19(月)	家族のどん底	町田 政明

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

【日時】第1・第3月曜日18:30~20:30(祝日も開催します)

【場所】アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)

【内容】ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。【予約】不要です

## <個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円

【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明(元神奈川立せりがや病院勤務、ホープヒル代表、寿アルク理事) 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。